陳情第 5 号

「BSL-4施設建設には少なくとも60%の近隣住民や市民の
合意を得ることを着工の必須条件とすること」を求める
陳　情　書

平成 30 年 6 月 12 日

長崎市議会議長
五輪 清隆 殿

陳情人代表　山里中央自治会
会　長　道津 靖子　印
住　所 [redacted]
連絡先 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

議会事務局議事調査課

長崎市議会事務局
平成
30. 6. 12
収受印
107

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

陳情人 [redacted]

「BSL-4施設建設には少なくとも60%の近隣住民や市民の
合意を得ることを着工の必須条件とすること」を求める陳情

【陳情の趣旨】

田上市長が、「近隣住民や市民の合意と理解と信頼の構築」を明確にしないまま、BSL-4施設設置容認をされたことに対して、私たちは不信感を抱いております。

私たちは、平成27年から、長崎大学がエボラウイルス等の日本に存在していない最も危険な病原体を海外から生きたまま持ち込んで、動物実験を行う施設設置に中止を求めてきました。市長による「設置容認」後も、ご自身が仰る「近隣住民・市民との合意と理解と信頼の構築」を明確にするよう繰り返し求めてきましたが、市長はたった一度だけ地元に出向き「話し合い」を行ったのみで、未だに容認の根拠が示されておりません。

又、私たち地元自治会は、市長の施設に対する危機意識の低さを非常に危惧しています。なぜなら、日本で初めてのBSL-4施設が長崎市に造られることになりますが、日本にはBSL-4に関する法律はまだありません。また、万一事故があったとき、長崎市として市民の安心安全をどう確保するかなど、問題が山積しているのに「全てを大学に依存している」ような状態なのです。

さらに、設置されてしまうと、「最も危険なウイルスを保持する施設」の側で、孫子の代まで「不安を感じながら」暮らすことになるのです。こんな施設だからこそ、一度立ち止まり、近隣住民や市民の合意を確認後に計画を進めるべきではないでしょうか。

私たちは、国立感染症研究所元主任研究官で、現在は「バイオハザード予防市民センター」代表幹事である新井秀雄氏から市長へ送られた「BSL-4施設の問題意識」についてのお手紙の抜粋を添付しております。これは、施設設置の問題点が分かり易く書かれており、「場所は重要な安全装置」であることを訴えるためのものです。

世界最高水準の施設でも動かすのは人です。人は必ずミスをする、想定外の事象が起ることは原発でも証明されています。だからこそ「予防原則の視点」でBSL-4施設を市議会の皆様にも考えて頂きたいと思います。

改めまして、長崎市議会の皆様におかれましては、私たち近隣住民ならびに市民の真情をご理解頂き、確認することなくBSL-4施設のリスクを背負わせてはいけないことを、市長へ強く働きかけて頂きますよう陳情致します。

私たちの要望事項は下記の通りです。

記

【陳情事項】

1. 事故が起きたらたちまち周辺住民に危害がおよぶ施設です。着工する前に、アンケート等で合意を確認する必要があることを田上市長に強く求めて下さい。

2. 近隣住民や市民の少なくとも60%の合意を得るまでは、「BSL-4施設設置計画」を一旦停止させ、これまでの経緯や長崎市としての関わりを中立の立場で検証した上で、大学へ設置場所の再検討を要求するように働きかけてください。

以　上

【陳情の趣旨説明資料】

「バイオハザード予防市民センター 代表幹事 新井秀雄氏※から、平成30年2月2日開催の田上長崎市長と住民との話し合い時に、市長宛に提出された手紙の抜粋」

何故 BSL4 施設を住宅地に建設することが危険なのか

1. 「ウイルスが漏出する不安とストレスの常態化」

バイオ施設で実験する者は、業務が終了すれば施設から離れて帰宅できます。
一方、周辺住民は移住でもしない限り、24 時間、年中、排出された空気がウイルスで汚染されているのではないか？と心配するストレスに晒され続けることになります。

2. 「実験する研究者と 周辺住民の健康状態の違い」

研究者は壮健な成人であるが、周辺住民の中には病弱者、乳幼児、妊婦、高齢者もいるので体力（免疫力）が弱っていると感染しやすいのです。

3. 「日本に存在しないウイルスを輸入し保持する危険性」

エボラ出血熱のような、いわばアフリカの「風土病」的な感染症は、現地で国際協力の下に世界に開かれた BSL4 が建設され、資金と人材が世界的に投下されるべきと考えます。

4. 「市長としての役目」

長崎市民の健康と生活、いのちを守る第一線にてご労苦される市長であられる貴職が、健康で平穏な生活の享受を望む長崎市民のみなさまのために、信念をもってきっぱりとした良心的対応を執り行われますよう、こころから祈ってやみません。

以 上

※ 新井秀雄氏プロフィール

1942年 静岡県生まれ。
1966年 北海道大学獣医学部卒。 獣医学博士。
1966年 厚生省 国立予防衛生研究所（現厚生省国立感染症研究所） 細菌一部に研究技官として着任。
主任研究官として百日咳、溶血連鎖球菌などの研究に従事する。
長年、所内からバイオハザードの危険性を指摘し、予研＝感染研裁判では、住民側証人として法廷で証言を行う。
ドキュメンタリービデオ『科学者として』（本田孝義監督、1999年）に出演。
同作は東中野 BOX など映画館で公開された。
2000 年 自らの心情を綴った『科学者として』（幻冬舎官）を出版。
2003 年 定年退官。
2018年現在 バイオハザード予防市民センターの代表幹事。
共著に『教えて！バイオハザード』（2003 年 緑風出版刊）がある。